

夏空パラレル

S o u & E r w i n

佐野光音

Hikarune Sano

termity



エタニティ文庫

I 神隠し

はりきって参加したゆうべの合コンも、空振りに終わった。

会った瞬間にときめいて一目惚れ、なんて劇的な恋の始まりは期待していない。ピンとこなくてもメールアドレスを訊かれれば、「お友達からお願ひします」と踏み出す心構えはバッチリできているのに、それすらないなんてどういうことなのか。「想は、真面目でおしとやかに見えるから気軽に誘いにくいんだよ」などと慰めてくれた友達の秀美は、昨日も三人の男の子とメアドを交換していた。

秀美を含めて大学の仲間が派手だから、自分が霞んで見えるのは自覚している。だからそれなりに頑張っているのに、成果に繋がらないのだ。グロスの光らせ方が足りなかったのか、にっこり笑顔がイマイチだったのか。練習するほど不気味になるので諦めた、甘い裏声が出せないせいなのか。努力と研究を重ねる虚しい青春。繰り返す一人反省会も役に立たず、彼氏いない歴を更新中なのがやる瀬ない。

私の春は、いつ訪れるのだろう。

大あくびで食卓に着き、おはようよりも先に「ホットココア」と母親に注文する。
「顔色が悪いな。昨日は帰りが遅かったのか？ アパレル研究会も忙しいんだな」

新聞から顔を上げ、年頃の娘に遠慮がちに探りを入れてくる父親に、まだ寝ぼけてるふりで「おはようございます。おばあちゃんもおはようございます」と、覇気のない声で返しておく。父親は怖くないけど、十一時の門限を無視して午前一時過ぎに帰宅、研究会なんて名ばかりの集まりで、合コンをして男の子たちに物色されていました、とはさすがに言えない。

そこへドタドタと響く足音。昨夜は親には秘密の未成年飲酒。二日酔いも少々入っているせいで、両耳を大太鼓で挟まれ叩かれているみたいに反響するのが最悪だ。

「お姉ちゃん、あたしのスカート出来上がった!」

おはようより先にスカートの話を投げつけられ、そのキンキン声にもイラつきながら、眉を寄せて妹を見やる。我が家の朝は、とにかくうるさい。母親が出してくれた甘いココアをずずすと啜り、重い頭を手で支え、頬杖をつく。この日も普段と変わらず、騒々しい一家団欒の朝を迎えていた。

「華。いきなり布を押しつけて来週までに作れって言われても、私にだって予定があるの。大学の課題も山積みなんだから。あの意味不明な落書きのデザイン画を持ってくるのもやめて」

「だってあたし、裁縫苦手なんだもん。ちゃんとあのとおりに作って！ 日曜日に着るの。裾にリボンいっぱいつけてね!」

甘い鼻声で詰め寄られて、うざいっただらありやしない。人を便利屋のように扱ひ、悪趣味な服ばかり作れとねだってくるが、こっちはかなりの労力を要するのだ。

「リボンリボンって、似合いもしないのにうるせー。リボンババア。つーか俺、今日パンの気分じゃない。ラーメン食いたい」

華に次いでやってきた弟の耀が、食卓に着くなりメニューにケチをつける。

「はいはい、インスタントしかないわよ。サラダを先に食べてなさい」

ラーメンとか言いながら、結局パンも平らげる育ちざかりの大食漢に、母親は大忙しだ。家族で一人、和食の朝御飯を好む祖母は、のんびりと焼鮭をほぐしている。

「リボンババアとはなによ?」

「悪趣味なんだよ。そんなに着たきや自分で作れつて。ねーちゃん、おまえの仕立屋じゃねえし」

よく言ってくれた、と心の中で弟に拍手を送り、ちびりちびりとココアを飲む私の横で、不満を増大させた華が今度は弟に食ってかかる。

「あんたがうるさいから朝の星占い見逃したじゃない! おかーさんっ、今日の牡羊座のラッキーポイントって何だった!」

自分より一つ下の弟に金切り声を浴びせる華は、中学二年になっても落ち着きがない。「しようもないこと言っていないで。ほら、焼き立てのパンが冷めちゃうわよ」

「しょーもなくはないの。あたしには大事なことなの！ おとーさんは聞いてない!？」

「俺が知るわけがないだろう。そもそもオヒツジ座だとかオウシ座だとかさっぱりわからん。どれも同じじゃないのか」

「同じなワケがないじゃない！ もおう役に立たないなあ。何のために一番テレビの見やすいその場所を陣取ってるわけ?」

「朝めしを食べるためだ」

「昼食も夕食も夜食もそこで食べてるじゃん？ ずるいよ、お父さんばかり」

文句を言っているうちに、論点が微妙にずれてくるのが我が妹。はたで聞いているとすぐわかるのに、正面切つてやり合つてると必ず一緒にずれていってしまう。次第に互いの言い分が支離滅裂になっていき、嵐が過ぎ去つた後には、何が原因でケンカが始まつたのかわからなくなっている。

「家族の中で一番働いている人間の特権だ」

「そうよね。いつも本当にご苦労さます」

眼の端に睨みを利かせた母親が、なみなみと注いだホットミルクのマグカップを父親の前に突き出している。咳払いをしてはぐらかす父親。これも毎度毎度のやり取り。

「俺聞こえてたよ、牡羊座。今日の決め事はあなただけでなく周囲も大波乱に巻き込んでしまう可能性大よ。決定は慎重にね！ ぐっつさ。はあとまーく付きで」

耀が唇を尖らせて器用に『ごきげんよう快朝テレビ・星座マスコットきららちゃん』の口真似を試みせる。

「やだ、そんな大事なお告げだったの!？」

「毎度毎度さあ、お告げつてどっからのお告げだよ？ よくそんな非科学的なことでも自分の行動を決定できるよな。信じらんね。自分のことくらい自分で決めらんねえの?」

口元を歪めた耀の切り返しに、華を除く家族一同が「よく言つた!」と心の中で快哉を叫ぶ。けれど当の本人は馬の耳に念仏よろしく、鬼気迫る勢いでテーブルに身を乗り出していた。

「うっさいわよ、小生意気な科学バカが。ゲームとSF大好きのあんただって、二次元どっぶりでぜんっぜん現実的じゃないじゃん。それで、ラッキーポイントは!？」

言い返すのが面倒になったのだろう、パンをかじり、「うぜ」とぼやくつつも、耀が考え込む。

「深呼吸と、……なんだっけかな。あ、そう、ネズミのキーホルダー。ラッキーカラーはロイヤルブルー」

口から出任せかもしれない耀の言葉を鵜呑みにした華が、早速深呼吸を繰り返しつつ

両目をくるくるさせる。

「ネズミ……ネズミのキーホルダー。ロイヤルブルー？ あったっけ」

考えを巡らしている様子だけど……やろうとしてもなかなかできない芸当だろう、目玉をぐるぐるさせながら同時に深呼吸するなんて。

「誰か、ロイヤルブルーのネズミのキーホルダー持っていない!？」

妹を除く家族全員の心の溜息が漏れ聞こえてくる。

「うちは百貨店じゃありませんよ。いいからさっさと朝御飯を食べなさい!」

呆れるのを通り越して冷めた口調で、母親が一喝する。

「ロイヤルブルーのネズミってドラえもんか?」

「ドラえもんは水色じゃね? つうかあれ、ネズミじゃなくて猫だろ」

父親の茶々に弟が真剣な顔で答え、それまで我関せずとお味噌汁を啜っていたおばあちゃんが、のほほんと口を開いた。

「キーホルダーじゃなきゃダメなのかい? ボールペンだったら黒いネズミのが電話の横のペン立てにあるんじゃないの?」

「そんなのあった?」

家族全員が、おばあちゃんに注目する。

「前に華が、遠足のおみやげで滋しげに買って来たじゃないの。デゼニールランドだかの、ミ

ツキーなんちゃらとかいう……」

滋とは私たちの父親の名前だ。自分の言うことに首を傾げながら、再びおいしそうにお味噌汁を味わう祖母。

「あれはネズミじゃなかったかね?」

「ネズミだッ!」

妹が手を打ち、リビングの隅の電話台に飛びついてゆく。

「ミツキーマウス。キーホルダーじゃないけど、まあいいや! おばあちゃんありがとうっ」

「どういたしまして」

「ばあちゃんビンゴ。でも、デイズニールランドってんだよ。出銭ランドじゃシヤレにならないじゃん」

パンと目玉焼きで口をもごもごさせて親指を立てる弟に、おばあちゃんがニコニコと笑いかける。

「あとはロイヤルブルーのもの、なんか探さなきゃ!」

バターとイチゴジャムを塗った焼き立てのパンを母親に手渡され、それを口にくわえながらウロウロしていた妹が、

「お姉ちゃんも探してよ」

と、協力してくれるのが当然という顔で私を見てきた。それが瘡に障り、姉らしい小言を言っておく。

「毎朝毎朝、部屋をパンくずだらけにしないでよ。靴下とか素足にくつついて、かなり迷惑なんだけど」

「スリッパ履けばいいじゃん。それよりもロイヤルブルー！」

「そもそもロイヤルブルーって、どういう色よ？」

姉のイチャモンに、ハタと立ち止まる妹。

「そう言われてみると、どういう色？」

真顔で私に訊き返してくる。憎らしいことばかり言うけど、こういう単純なところは可愛いと思ってしまうのだ、不覚ながら。

「高貴な青？」

質問され、二日酔いと低血圧の影響か、上手く回らない頭で首を傾げていると、

「王族の青」

「セレブな青」

適当に答え始める父親と弟。

「って、だから、どんな色なのよ!!」

「ブルーサファイアや、コバルトスピネルのような色じゃないかしら」

やっと食卓に腰を落着けた母親が朗らかに言う。宝石が好きで、彫金を仕事にしていたこともある人だから、物のたとえに宝石の類を持ち出すことがよくある。家族皆がそれに慣れていているし、母親らしいとも思っていたりする。

「そっか！　じゃあ、そのスピなんちゃらや、ブルーサファイアを持っていけばバツチリ？」

「どこに持っていくの。あっても渡しませんよ、バカ言わないでちょうだい」

「おかーさんのケチ！　お姉ちゃんは持ってない!？」

「持つてるわけじゃないでしょ。なんであんたと話しているとこんなに疲れんの。あんたの行動を見せられ聞かされるだけで、朝から疲労困憊する」

「うわあ、ババクサ。そろそろヤバイんじゃないの？　あたしが作った魔法のお水、飲んでみたら？　若返るから」

「何がヤバイのよ」

ドンと目の前に置かれたコップを、「魔法の水だあ？　また怪しげなブツの実験台にしないでよ。気色悪い！」と悪態をつけて押しのかた。

「そうやってすぐ乗らないの、想。年上なんだからもう少し優しさを持ちなさい」

口早に母親に注意されて、押し黙る。妹とやり合えば、先につっかかってくるのが妹でも、叱られるのは私だ。それがわかっていて意識的に仕掛けてるんだったら、妹も大

した頭腦の持ち主だ。弟とは違い学校の勉強はからつきしで、下から数えたほうが早い順位だけだ。

「うちそうさま」

朝から炭水化物を食べると胃もたれするので、ココアと目玉焼きと果物だけで済ませるのが私のいつもの朝食になっている。魔法の水とやらを家族全員にいそいそと配り、「絶対飲んで。おいしいんだから」と強制していた妹は、今度はさくらんぼの数で弟と揉め出していた。騒ぎを尻目に、歯磨きをするために洗面台へ行き、それから自分の部屋に戻って大学の時間割とバッグの中身を見直した。この頃になるとようやく全身に力が入るようになる。コテで巻き髪を仕上げてから、姿見で形を整えて服装を含めた全体をチェックする。

ミシンの上に広げたままの華のスカートを見やり、日曜日までにはどうにかなるかなと今後の工程を考えてみた。出来上がったら真っ先にお母さんのところに見せに行き、手間賃として、マイブームの香水を買ってとおねだりしてみよう。二十歳になるまでバイトは駄目だと父に禁止されているので、代わりに妹の洋服を作り、母から臨時のお小遣いやご褒美をもらっている。

華には内緒だけれど、相当な労力をかけているのだからこれくらいの特権は許してもらいたい。けど、妹の我儘に文句を言いつつも、できたばかりの服を着てびよんびよん

跳ねて喜ぶ華を見るのもまあまあ嬉しいのだ。「華はっかりズルイ」とたまに不貞腐れたりする弟にも、今度何か作ってあげなきゃと思いつながら、グロスを塗って部屋を出る。

今日は一時限目から講義があるので早めに行かなければと、バッグを抱えて早足でダイニングに戻った。家族の顔を見て、「いつてきます」と「ただいま」を言うのは、穏和なおばあちゃんに約束させられている唯一のことだ。

廊下ではなく襖ふすまで仕切られた和室を幾つか通り抜けてダイニングに向かう。そのほうが近いのだ。さつきダイニングを出てからまだ十五分足らず、七時四十二分なら余裕がある。低血圧のせいで朝の時間配分が狂いやすくなるので、起きてすぐに腕時計を付け、家を出るまでに何度も確認するのが習慣になっていた。

「いつてきます」

言いながら、ひょこつとダイニングに顔を出す。そこで、あれ？ と目を見開いた。誰もいない。

きよろきよろとあたりを見回してみても……誰の気配もしない。

学生鞆が放置されているから、華たちはまだ登校していないようだ。また二人で悪ふざけをして、かくれんぼでもしているのかもしれない。——けど、母親や、おばあちゃんまで？ 誰かお客さんでも来て、揃って外に出たのだろうか。食事も食べかけのままで。ケトルの音がピーイッと鳴り、我に返った私は、慌ててキッチンに入ってガスコ

ン口の火を止めた。

資産家一家、謎の神隠し。

家族が行方不明になったという情報はその日のうちに町内を駆け巡り、翌日にはメディアまで大挙して大騒ぎになった。

家族が消えた朝、私はからかわれているのかと思ひ、家の中を見て回った。庭や裏手の山、近所もうろついてみた。数十分後、再び家に戻ってきてもまだ誰もおらず、玄関を確かめると、華と耀が学校に履いていく学生靴も父の仕事用の革靴も、ピカピカに磨かれたまま揃えて置かれていた。祖母が愛用している草履ぞうりもそのままだった。

それまで呑気に構えていた私もさすがにおかしいと思ひ始めていたそこへ、ダイニングから携帯の着信音が響いてきた。食卓に置かれていた父の携帯を急いで手に取り、『会社』の表示を確認してから電話に出てみる。「部長がまだ出勤していないのですが」と事務の女性に告げられ腕時計を見ると、既に九時過ぎていた。連絡がいたら折り返し電話をする^{と伝えて}携帯を切り、やはり食卓に置きっぱなしの華と耀の携帯を見つめる。

何かが変だ。始終携帯をいじっている華のことだ、どこに出かけるにしても携帯を忘れるなんてありえない。父だって、職場に断りを入れず遅刻や欠勤をする人じゃない。

不安になりながら、それまでよりも注意深くあたりを見回したそのとき、心臓が竦くみ上がった。椅子と椅子の間に点々と落ちている、赤い滴しずくに目を凝こらす。木の床の上で乾き始めているそれは、血痕ちまみにしか見えなかった。

——血？ どうして……？

悪寒が走り、気づいたら震える手で携帯を掴み、警察に電話をしていた。その間にも、華や耀の学校から相次いで「登校していない」と自宅の電話に連絡が入る。取り乱した私から事情を聞いた警察が駆けつけ、床こに落ちているのが間違いなく血液だと判明するやいなや、携帯も靴も靴もそのままそのままで忽然とたんと消えた家族について、直ちに近隣住民に事情聴取が行われた。

それを聞きつけたマスコミが押しかけてきて、テレビや新聞で『突然消えた資産家一家。強盗か身代金目的の誘拐か』『手掛かりは何もなく謎だらけの事件。現代の神隠し』などと報懸念し警察が捜査へ』『手掛かりは何もなく謎だらけの事件。現代の神隠し』などと報じられるようになる。金目のものなんて何もない我が家だけど、この家のある四百坪の土地と、雑木林になっっている裏手の山だけは資産価値が高いらしい。家は築七十年ほどの日本家屋で、敷地内にある洞窟を気に入った曾祖父がこの土地を買って建てたのだそうだ。洞窟は、ここから数百キロ離れた富士山に繋がっているともいわれていた。奥に行く^と洞窟の高さが低くなり人が通れなくなるので調査ができず、確かなことはわから

ないけれど。

この家を建てている最中に、二人の大工が亡くなる事故もあり、当時から地元では「大工の死は洞窟の主の祟り」と噂されていたという。ここに十九年住んでいた私でさえ知らずにいた古い噂話を、近所のお年寄りから聞き出したマスコミが、『蘇る現代の祟り』『末代まで祟られた資産家の悲劇。残された長女の運命は』と、怪事件として大々的に煽るのを、警察署内のテレビで私は他人事みたいに眺めていた。自分の身に起きたことなのだと言いついても、まるでドラマ中の出来事のように現実味がなかった。

警察から取調べまがいの事情聴取を受けること三日。ようやく四日後に自宅に戻ったときには立っているのもやっとなぐらい疲れ切っていた。母の身内はなく、父の親類も北海道をはじめとして海外にまで散っていて、近くに頼れる大人もいない。残された私にもまだ危険が及ぶ可能性があるということで、しばらくは警察の人が目立たないように警護してくれると言っていた。

自分の部屋に行くと、あの朝のまま、ミシンの上に広げられているスカートが目についた。

このスカートを華が着る日が、来なかったら。先のことを思い、気丈に振る舞おうとしていた心が崩れそうになる。スカートを抱きしめて、わんわん泣きたくなくても……私が泣いていたら、駄目だ。無事を信じて、これから家族を捜さなければならぬのだ。

シャワーを済ませ、友達の家にはばらくお邪魔させてもらおうか、気持ちを落ち着かせるために大学の講義を受けようか、いや、むしろ休学も考えるべきかと思案しながら、バッグを肩にかけて外に出ようとする。表で待機しているマスコミに絡まれるのは不快だけれど、家の中にはいたくなかった。事件の線が濃厚との見方で、あちこちに警察による立ち入り禁止線がある。こんな物々しさが漂うところで一人で過ごす気分にはなれなかった。

こんな……火が消えたような家にいるのは、初めてだ。

このまま家族が戻らなかつたら。私、どうすればいいんだろう。

とめどなく溢れ出る不安に呑み込まれそうになり、喉がきゅつと痛くなった。口の中もカラカラになり、何か飲もうとキッチンに入る。冷蔵庫を開けると、妹が作った「魔法の水」が、ペットボトルに残っていた。水に水晶を入れ、月の光を当てて浄化させたものを飲むと、運気が上がるとか身体にいいとかヘンなネタを仕入れてきたのだ。「裏の洞窟から汲んだ水だから最強よ」なんて言っていて、先週買ってきたばかりの水晶をその中に入れて月光に当て、次の日の朝、家族に意気揚々と振る舞っていた。——家族が忽然と消えた、あの朝。

ペットボトルには子供っぽい字で、『注意。一週間以内に飲まないで魔法が消滅』とマジックで書かれてあった。魔法の前に、水が腐るんじゃないの？ と、苦笑が零れて

くる。

ちようど何かを飲みたかったし、これでいいかと、ペットボトルの水をコップに注いで一口飲んでみた。

……どうってことのない水だ。元々入っていたジュースの、葡萄ぶどうの匂いが残っている。残りがコップ一杯分だったので飲み切って、中に入ったままの水晶を取り出した。長さは五、六センチ、親指ぐらいの太さで、光に透かすととても綺麗だ。珍しい水晶がどうのと自慢げに話していた妹の顔が、ありありと蘇よみがえってくる。ひと月分のお小遣い、五千円全部を使ってこの水晶を買ってきて、母から大目玉を食らい、泣きべそをかいていた表情の細部まで思い出せるのに。

「魔法の水、ね……」

水晶をなくさないようポケットに入れてから、静まり返ったダイニングやリビングを見渡して、独り言を呟いていた。足取り重く玄関に戻る。ミニールを履いて立ち上がったところで、そのまま動けなくなってしまった。

——うるさくたっていい。ケンカをしてもいい。そのたびに怒られるのは私でもいい。帰ってきてよ。私を、一人にしないでよ。本当に魔法の水ならば、私の願いを叶えてよ。妹に、お母さんに、弟に、お父さんに、それから祖母に。みんなに会わせて。

泣き崩れた瞬間、体が、硬い何かに叩きつけられた。

意識を失いかけながら、玄関の床に倒れたのだと、自分では思っていた。

けれど、その床は妙に温かった。——うちの玄関は、石造りのはずなのに。

何の熱だろうと、急に痛み出した頭を押さえて薄目を開けた直後、その床が動いていることに気づき、そのまま私は再び違う床へと落とされた。

違う床。さつきより硬くて砂混じりの、ざらついた床。……どこの床？

え？ と思うのと同時に、真横に黒くて丸い物体が甲高い音を立てて止まった。埃っぽい、焦げたような匂いが仄ほかにする。

「大丈夫かい!？」

男の人の声がしたので、家の中にまだ警察の人がいたのだと思った。一人じゃなかったことに少しだけ救われて、新たな涙を零ほしかけたとき、私を覗き込む薄いブルーの瞳に目が釘付けになった。

ずいぶんと、まあ……ハンサムな、お巡りさんだ……

「よかった……、生きてるね」

両膝に手をつき、がつくりと上半身を倒しながら、全身で息を吐き出して安堵している。ずいぶんまた、大袈裟おおげさな。倒れただけなのに。涙で曇る目に映るのは、これまたスラリと長い足。シルエットの綺麗な黒いストラップスに、着こなすのが難しそうなデニール

パープルの半袖シャツを合わせているその姿に、警官にしてはこれまたお洒落だわと目を見張る。そのときになって、ようやく私は異変に気づいた。

ここは、家の中じゃない。外だ。——外。外？ ……え？

なぜ私、表にいるの!? 家にいたはずなのに!?

「君、ボンネットの上に直下してきたよね? どこから降ってきたの? ここ、歩道橋もビルも、高い樹木もないけど」

彼はそう言うのと、段々と落ち着いてきた顔で私を見てから、あたりを確かめるように見回した。

——そんなのこつちが訊きたい。家にいたはずなのに、私、なんでこんなところにいるの!?

痛む頭を持ち上げ、彼の視線を慌てて追うと、すぐに見覚えのある場所だとわかった。大学の近くだ。

このあたりは国内外から研究機関が集まり、大学も多く、学術都市として全国的に知られている。その中の一つの女子大に私は通っているので、パッと見ただけでここが馴染みのあるところだと判断できた。…寝ぼけてここまで来ちゃったのかな。水を飲んでいたあたりまでは、記憶があるけれど…

「急に体を起こさないほうがいい。病院に行こう」

「大丈夫です、…立てますから」

頭がちよつと痛いくらいだと断つてから、スカートからむき出しになっていた生足の太ももに気づき、パッと裾を掴み下ろした。彼はとっさに顔をそむけてくれたけれど…下着も、丸見えだったかも…

超恥ずかしいっ! なんなの、この珍事は!!

これは、事故よ。事故。原因は滅茶苦茶不明だけど、単なる事故なんだから、なかつたことにしてしまうのよ。彼も気にしてなさそうだし、見えてなかったと信じよう。

のろのろと立ち上がり、頭痛以外は痛みのない体を見下ろして埃をはらう。着てまだ二回目のお気に入りの白いワンピースのほうが、ケガの有無より気になってしまう。

しっかりと抱えていたショルダーバッグを肩に掛け直して彼の前に立ち、身長が一六〇センチ弱の私より、二十センチは背の高いその人を見上げた。

…この人。本当に瞳が青い。…薄い青。水色の紫陽花色。華やかな光を湛えているのに、寒色のせいとか、どこか寂然として見える。黒に近いカラメル色の短髪は緩い癖毛で、気合を入れたセットではなく自然な感じで額にかかっている。年は二十代前半だろうか。よく見れば、顔の造作も日本人っぽくはない。言葉は普通に日本語だけど。

研究施設には海外から赴任してくる外国人も多いとはいえ、私が普段の生活で関わることはほとんどない。それに、こんなに容貌が整った人に遭遇するのも初めてだ。

状況が呑み込めないまま、ぼう然としている私を、信じられないものでも見るようにその人は眺めていた。こっちが赤面しそうなほど、まっすぐに見つめてくる澄んだ瞳がとても綺麗で、うろたえつつ……私も、目をそらせずにいた。

二人で見つめ合い立ち尽くす奇妙な時間の後で、彼が口重く言う。

「死のうとして、どこから飛び込んできたんじゃないよね？」

「死……え？ まさか！ 全然」

ぎよつとして首を振りながら、バサバサに乱れていた巻き髪を片手で押さえる。踏みだり蹴ったりというか、みっともない格好を披露しまくりで、この不可解な状況とは別の理由で泣きたい。

「それなら、いいんだ。念のために、自宅に戻ったほうがいいんじゃないかな？ よかつたら家まで送るよ。乗って」

一瞬、目を細めた彼が、優しく微笑してくれたので、それに釣られて私の気恥ずかしさも幾分和らぎ始めていた。勧められるまま、車の助手席に座る。ハンサムな男の人の車に乗れる経験なんて、滅多にない。不可解な状況はさておき、これはもしやチャンス到来？

なんてお気楽なガッツポーズを脳内でかましていたくせに、乗ってしまったから、知らない男性の車にホイホイと乗り込んでしまつてよかつたのかと身が竦む。チャンス到

来どころか、浅はかすぎるでしょ、私。家族のこともど忘れして、しかも生足まで際どく披露しちゃうとは。なんせ、中学高校は女子校、大学も女子大、合コン以外で男子との免疫がなかった純粹培養なので、チャンスも危機意識もヤミ鍋煮込み状態なのだ。つまり、判断能力がゼロってこと。

「頭が痛いつて眩いてたね。具合はどう？」

運転をしながらも、ちらちらと気がかりそうに私を見やり、彼が訊ねてくる。

当の私はドキドキしたり青ざめたりに忙しくて、頭痛のことなど数分で忘却していた。「もう治りました」

忘れるぐらいなもの、どうってことないに違いない。

付けられているカーテレビの時刻が、そろそろ十一時を回ろうとしていた。鮮やかなブルーのスポーツカーは、私でも知っている日本車だった。車の窓から見る風景は、見慣れたはずの街並みなのに、不思議と様変わりして見える。シヨッピングモールもファミレスもコンビニも、見知っているものなのに、知らないところを通り抜けているように居心地が悪い。隣にいる人のせいもあるのだろう。

「七月十日、午前十一時を回りました。ニュースの時間です」

テレビで何度も見ているお堅い印象の男性アナウンサーが、安定した口調で淡々とニュースを読み上げている。家族が姿を消してから、ちょうど四日目の朝。また昨日と

同じように、忽然と消えた資産家一家、なんてニュースが流れるのかもしれないと身構えていた。けれど、野次馬根性丸出しのうるさいワイドショー番組とは違い、そのニュースは政治と世界情勢のいくつかを取り上げただけで終わり、次の番組へと切り替わる。詰めていた息を吐きながら、運転をする彼に「そこを右に」とか、「次の電柱を左に」と道案内をし、心配していた危機的状況は何も起こらないまま、車は我が家の門の前に停車した。

「ありがとうございます」

このまま、お別れになるんだ。そう思うと物足りなくなってくる。かといって、この後をどう繋げればいいかなんて、色恋沙汰超初心者の私には見当もつかないわけ。

名残惜しく思いながら車を降り、古くて大きな木の門の前に立った私は、「あれ?」と眉を寄せてあたりを見回した。開け放たれている片側の門扉の、その奥の様子に目が点になる。

家が………立派になってる。同じ日本家屋でも、重厚感や風情が、まるで違う……。「名刺を渡しておくよ。怪我や後遺症があったら、ここに連絡をして」

混乱しながらも、頭の片隅で、「やった! 名刺ゲット!」と喜べるぐらいの余裕はまだあったようで、わざわざ車から降りてそれを渡してくれた彼に「すみません」と呟いた。

……クラウンパロー研究所。

第二コンピュータ開発部主任研究員理学博士エルヴィン・ファーレンブルク。

やっぱり日本人じゃなかったのね、と思いつながら……頭が再びガンガンしてきた——思考がこんがらがって。

「じゃ、僕はこれで」

「——待って。待って! 訊きたいんだけど」

「どこか痛い?」

「頭がちよっと……ううん、それはいいの。そうじゃなくてね。数時間で——三十分足らずで、家が、完璧に建て直されてることって、あるかしら?」

「………ドッグハウス?」

目を瞬かせて呟かれたそれに、からかわれてると思い、気が動転しているのもあってカチンときた。両手を大きく広げて、身振りで家を示してみる。

「コ・レ・が、犬小屋に見える!」

「建て直されてるの? 君の家が? 三十分で?」

「まるで違うわ」

「さっき、やっぱり、頭を打った?」

「打った記憶はないけど、本当におかしいのよ。私の頭がじゃなくて、状況が」

「じゃあ、君の家じゃないとか」

「表札と門構えと塀は同じなのよ！ 見て、舞崎まいざきってあるでしょ？ 私も舞崎！」

「君がマイザキさんかどうかは、僕は知りようがないんだけどね」

「身分証明書！ 見て？ ほら」

バッグを引つ掻き回して、慌てふためいたまま学生証を突きつける。

「マイザキ・ソウ。……名前はわかったけど、これどこの大学？」

「地元の大学よ。バカにしてるの？ そりゃ二流だけど、就職するには悪くないそこそこの女子大で」

「この住所に、大学はないよ」

「え？」

「ここにあるのは、うちの研究所だ。僕が勤めているところ。さっき渡した名刺を見て」

「は？」

名刺？ 手にしているそれを食い入るように見つめてみる。

「君の学生証の大学所在地と、見比べてみてくれ。同じ住所だろ」

「……………」

……同じ住所だ。番地まで、そっくりそのまま。なに……これ？ どういうこと!?

「ああ、思い出した。大学があったとは、聞いてる。そこそこ伝統のあった中高一貫の

女子大で、今は違う市の大学と合併して移転してるよ。そのときに共学になって、大学名も変更したとかで、すぐに気づかなかった」

「違う市の大学と合併して移転？ 共学？ 大学から聞いてないけど？」

「だろうね、たぶん二十年前の話だから。学生証どおりの年齢なら、君はまだ生まれていない。十九歳の、ミズ舞崎は」

——二十年前に、大学が合併して移転？ じゃあ私は今まで、一年あまり、どこの大学に通っていたってわけ!?

硬直したまま、顔面も蒼白になっているだろう私を、困ったように彼が見つめている。心配と、私がまともかそうでないかを確かめようとする冷静さだが、彼の表情を交錯している。

「僕には、選択肢が二つあるんだ。一つは君をここに放置して、何も知らないふりで職場に戻り、君のことは忘れて自分の生活を楽しむこと。もう一つは、君を拾って、とりあえず——コーヒーでもご馳走する」

「……………」

「君にも、選択肢が二つある。ここに残って、一人で家と、解決策を探す。あるいは、正気を取り戻すために、その辺で昼寝を試みる」

「正気って。私の頭がおかしいと決めつけてるのね？」

「それはこれから判断する。その前に教えておくと、君の選択肢のもう一つは、僕とコーヒーを飲みに行くことだ。どっちがいい？ 君が決めてくれ。合わせるよ」

「どうしたらいいか、わからない。……喉が渴いて、混乱して、何が何だかわからないから……コーヒーを飲みたい」

「じゃあ、そうしよう。眠気覚ましにちょうどいい」

「私、夢見心地でいるわけじゃないわ」

「君に言ったんじゃない。僕が眠気覚ましを必要としてる」

連れ立って入ったカフェで、私たちは無言でいた。

何を話したらいいのか、見当もつかない。見知らぬ相手、それだけが理由じゃない。ここへ来る車の中で、彼が「情報を整理しよう」と、状況を振り返り言葉にして並べた直後から、私たちの沈黙は重さを増してしまっていた。

家にいたはずの私が車のボンネットに落下したこと。街並みや周囲の風景はそのままなのに、私の家だけ様変わりしていたこと——三十分と経たないうちに。私の学生証の住所に、通っていたはずの大学は存在しておらず、二十年前に移転していること。そこに、私が付け加えた情報が、さらに彼を面食らわせていた。

家族が忽然と消えてしまったこと。失踪したのか、十五分足らずの間に揃って誘拐さ

れたのか。警察も近隣の住人もメディアも大騒ぎになり、精神的にまいっているときになぜまたこんな事態になっているのかと、泣きそうになりながら私は吐き出していた。

「警察署でも、事情聴取の間に連日ニュースを見ていたの。事情が事情だからと警察も見せてくれたから。あなたもこの事件は知っていると思うけど、一人残された長女って私のことなの」

「……申し訳ないが、その事件について、僕は知らない。ニュースは毎日チェックしているけど、新聞でもテレビでも、まったく見かけていない」

知らない人もいるのね、と思ひ顔を上げると、運転している彼の横顔が険しくなっていた。

「なんだか変なことになってるけど、このまま警察署に行ってくれてもいいわ。向こうも私を知っているし、そこで心を落ち着けてから、また家に帰ってみる」

友達のところにも、と言おうとして、思い直す。冷静に説明できる自信がない。それに、気心の知れた人たちに会えば、張り詰めているものが切れて取り乱してしまうかもしれない。

「警察に行っても、無駄だと思うよ」

「なぜ？」

「解決するとは思えない。それどころか悪くすれば、頭がおかしい人間として病院に強

制収容されるかもしれない」

そう言って黙り込んだ彼に、私は何も言い返せなくなっていた。病院に強制収容される。その物騒な物言いに、疑問よりも恐怖を感じ、コーヒーを断って車を飛び降りたくなっていた。隣にいるこの人物が、危険な人かもしれないと、突如として湧き上がる疑惑。警察に行っても助けてもらえないと私を怖がらせ、どこかに監禁しようとしているのかもしれない。

膝の上に重ねた両手の指がかじかむほどの恐れに駆られながら、それでも私は車を飛び降りなかった。彼の目の前に立って、薄い青の、紫陽花色の瞳を見上げたあのときの感覚が、私にそれをさせなかった。

数分後、私の疑惑を嘲笑うかのように淡々とした態度を保ったまま、彼は、街の外れにある洒落たカフェに私を案内した。

「煙草、いい？」

向き合ってしばらく経ってから、彼が言った。この店に来てから三言目に言った台詞だった。一言目は、「注文、何にする？」だった。「おなかすいてない？」が、二言目。それから、ずっと沈黙していたのだ。どうぞ、と答えて、冷めきったカフェオレに口をつける。五度目に腕時計を見たときには、ここに着いてから二十分が経過していた。

私は、彼とできるだけ目を合わせないように、手元のカップを見つめ続けていた。黄

土色の素朴な陶器に金の取っ手のデザインが面白いそれはお店の特注の焼き物なのかと、現実逃避みたいに考えながら。

「あの」

「ところで」

同時に言葉が発した後で、彼が私に片手を差し向ける。

「レディファースト」

「期待させて申し訳ないんだけど、お手洗いに」

彼は表情を変えずに、「入り口から左に行って、突き当たりの右奥」と簡潔に言う。

この店の常連なのだろう。入ったときも女性の店員が、彼に親しげな微笑を向けて挨拶をしていたから。私に向けた眼差しは、冷やかだったけれど。

個室から出て、洗面台で手を洗う。トイレの中にも有線放送が流れている。私は聞き覚えのある音楽に耳を傾けた。最近CMでも流れている、人気のある外国人女性の新曲だ。洋楽はあまり聴かない私でも知っている、とても有名な人。

「……………何がなんだか、わからない。」

家族がいなくなった。気づいたら、通っている大学のそばを走る車のボンネットの上に落ちていた。けれど、あるはずの大学はそこになく、二十年前に移転していると。彼の話が本当であれば。……………それに、家のことも説明がつかない。住み慣れて

いたはずの家が、まるで違うものになっていた。門構えも、周辺の家も、同じままなのに。

知っている街。生まれ育った街と同じ。なのに、どこかが違う。何かが違う。大学がないって、どういうこと？ 知っているテレビ番組。知っているアナウンサー。知っている海外の歌手。なのに、私の知っている現実と、少しずつどこかがずれている。

何か私、勘違いしているの？ 自分では平常心を保っているつもりだったけど、精神におかしくなってきたら、騙されているのだろうか。

それとも、巧妙な罠に嵌められて、騙されている？ 誰が？ 何のために？ まさか、家族を連れ去った犯人の仕業？

それよりも——彼は、いるだろうか。

私がトイレから戻ったら、姿を消しているかもしれない。いや、もしかしたら私が幻を見ているだけで、彼が実在している人かどうかもわからない。そうでなくても、関わるのが面倒になってそのまま私を置き去りにしていなくなっているかもしれない。

けれど、トイレから出て、ふわふわする足取りで席へ戻ってみると、彼はそこにいた。トイレに一人んでいたときは、夢を見ていたのかもしれないと思う気持ちがあった。

なのに、こうして彼を見ると……その人がいる事実、気が遠くなりそうになる。

夢じゃない。——ううん、これもまた、夢の続きなの？

彼が私を置き去りにせずにそこにいることに安堵しているのか、彼が確かに存在している事実、ショックを受けているのか。自分の気持ちも混沌としていて、よくわからない。

椅子に座らずに、私は、こちらを見上げた彼に言った。

「研究所に連れていってくれる？ 本当に、そこにあるのかどうか、この目で見たいの」

「今日は土曜で人がほとんどいないから、中に入ってみようか？ 一部分なら関係者じゃなくても見て回れるよ」

再び彼の運転する車に乗り、見覚えのある風景を確かめているうちに、彼の言う「研究所」に到着していた。大学であれば、教職員用の駐車場として使われているところだ。

それから裏庭へと案内されると、雑木林に囲まれたテニスコートがあった。大学で使っていたものと同じだ。けれど、ベンチや、片隅にある更衣室やトイレは立派なものに変わっていて、『クラウンパロー研究所』という文字が打たれている。もらった名刺に書かれていた名称と同じ。

建物の配置や青々と繁る北側の森、その手前にある飄箆池などにははつきりと覚えがあるのに大学の外観はまったく違って、ひょうたいけ「本当に大学がない」事実、敷地内を一

歩一歩踏みしめて歩くことに私は茫然自失状態ぼんぜんじしつじょうに陥おちっていった。

その後、彼の提案でもう一度、自分の家なのか、違うのか、言いようがない場所へ向

かった。

先刻は見かけなかった車が、門の前に止まっている。かなりの高級車だ。ベンツだろうか。こんな外車に乗ってうちに来る人がいたんだろうかと目を見張っていると、左側の運転席から女性が降りてきた。——お母さんだ！

「母だわ。よかった、無事だったのね！」

「……あの人が、君の？」

訊ねる彼に返事もせず、安堵でいっぱいになりながら車のドアを押し開ける。なぜあんな高級外車に、などこのときは思いもしなかった。

「もう少し様子を見たほうがいい。顔つきや容姿は同じ？」

急いで車から降りようとした私を、彼の手が引き止めてきた。

「同じよ」

「年齢も変わらなそう？ 仕事は何をしている？」

変なことを聞くのね、と訝しみつつも、視線を母へと向ける。

「髪型や服装が見慣れないものになっていて、若々しく感じるけど、年は失踪した時のままよ。数日前と同じ。仕事はしてないの、専業主婦よ。——あ、華！」

「ハナ？」

「妹の名前よ。舞崎華」

「……妹さんも、変わらない？」

「背格好も同じよ、髪の長さが違うだけ。制服も通っている私立中のものだし」

学校へ挨拶にでも行ったのかしら、と独り言を漏らした私に、「制服……」と、口ごもる声が届く。

「君の知っている妹さんは、年齢はいくつ？」

「十四。後部座席から弟も出てきたわ。あれもまんま、弟よ。四日前と変わらない。弟も妹も無事だったみたい。父と祖母は見かけないけど、三人とも笑っているから何事もなかったのね」

テニス部の華と野球部の耀の、健康的に日焼けした笑顔を見て、涙が滲んできた。

よかった……無事でよかった。家が様変わりしていることや大学の件は忘れかけながら、全身から力が抜けて瞑目していた私の耳に、溜息が聞こえてくる。運転席を見ると、彼は深刻そうな目つきでフロントガラスの向こうを見つめていた。

「ここに来るまで、僕は仮説を二つ立てていたんだが、有力視していたほうは、どうやら違うらしい。そしてもう一方の説は、科学的観点からはありえない」

「ありえない？ 何の話？」

仮説やら科学的観点やら、あなたの言う単語のほうが意味不明でありえないわよと言いたいのを呑み込み、助手席のドアを再び開けようとする。

「とにかく、お母さんたちに会ってくる」

「駄目だ。会わないほうがいい」

「どうして？ 私の顔を見せたら、あっさり解決するかもしれないし」

「余計にややこしくなるかもしれない。君と、この世界にいる君が鉢合わせになったらまずい」

「君と、この世界にいる君？ 何の話をしているの？」

あなた、頭は大丈夫？ とは口に出さずに、顔をしかめて彼を見やる。

「僕は君が、君が住んでいた世界を主軸にして、二十年後の世界にタイムスリップしてきたのかもしれないと考えていた」

タイム、スリップ……。住んでいた世界を主軸にして、二十年後の世界？

「でも、そうではないらしい。二十年後の世界なら、ここにいる君の家族もその分、年を重ねているはずだからね。学生証で見た君のバースデーとも合わないし」

「バースデー？」

「今は二〇××年七月。君の生まれた年から十九年後。君の頭の中のカレンダーと同じ？」

「同じよ。っていうか、タイムスリップなんて、荒唐無稽なこと言い出さないでよ」

「もっと荒唐無稽かもしれない。並行世界の壁を越えてきた可能性がある」

「は？」

「現代の科学において、未来へのタイムスリップは理論としては成り立っている。けれど、並行世界の存在についてはまだ仮説の域を出ていない。壁を越えることに至っては不可能だとも言われている」

「へいこう、せかい？ つて、なに？」

「大学では何を専攻してる？」

「え？ 被服デザイン……」

彼は、再び深い溜息をつき、憂鬱ゆううつそうに瞬まばたきを繰り返してから、私に言った。

「一から説明する。ただし、場所を変えたい。もう一杯コーヒーが欲しい」

「お店に戻るの？」

「僕の家に行く。人の耳がないところがいい」

——僕の、家？

II 可能性はゼロじゃない

彼につれてこられた五階建てのマンションは、エントランスもエレベーターも高級感が漂う、ひと目でかなりいい物件だとわかるものだった。バリアフリーの大理石の玄関で、おずおずとミニールを脱ぐ。純和風の古民家、リフォームしてあるとはいえ築半世紀を超える我が家とは大違いのモダンなデザインだ。

たつぷりと日が射す広いリビングに通され、白い革張りのソファに遠慮がちに腰を下ろす。背もたれには、ベルベットに似た手触りのヌバックカバーがかけられたクッションが置かれている。グレーや淡いブルー、クリームイエローの配色が個性的だった。部屋の色調は白とこの三色でまとめられ、全体に涼やかで優しい雰囲気がある。

コーヒを用意すると言い、彼はカウンターの電話機のボタンを押すと、そのままキッチンの中へと消えていった。途端、リビングに大音量で響き渡る女の声、声、声。『ねえ。今度いつ会えるのお？ 二か月もご無沙汰なんだけどお』ピーー。『マジで連絡取れなくて超ムカつく。毎日電話してるのに、なんで無視してんのよ！』ピーー。『Fuck you!!』。七、八件の留守録がどれもこんな感じ、しかも全て違う女性の声ときてる。

「あの……ここには、ご家族と？」

「僕一人だよ」

ボク一人ってことは、このメッセージは全部あなた宛てってこと、ですよね？ ……チャンス到来なんて浮かれて、うほうほ飛びつかなくてマジでよかった。英語は苦手でも、ファックユーくらいは、わかる。女にそう怒鳴られるなんて、いったい何をしてるんだ？ この男は。……私、ここに来ちゃって、よかつたんだらうか？

「携帯、電話って……ないの？」

なんでみんなわざわざ自宅に電話をするのかと訝しむつつ、おずおずと訊ねてみた。ここがどこかは、明確には判断できないけれど、私が当たり前前いぶかに思っているものが、当たり前前ではないかもしれない。と思い、うろたえてしまふ。

「携帯は嫌いだから、持たない」

携帯、普通にあるんだ。タイムスリップだの並行世界の壁を越えてきた可能性があるだのと不気味なことを言われたから、思考や感情が右往左往している。

「持ってる人、少ないの？」

「持っていないほうが珍しいよ。縛られてる感覚が鬱陶うっとうしくてね。どこにいても誰かに捕まるなんてゾツとする」

そりゃあ、しょっちゅう誰かに捕まることをしているからでしょう。ここに来て五分

足らずで、七股八股かけていそうな交遊関係を聞かされた身としては、携帯を嫌がるのも頷ける。

「あなたって、あれ？ 三角関係だと角が立つけど、十七、八の多角関係なら丸くなつて角が立たないって屁理屈を持ち出す、どこぞの女好き芸能人みたいなタイプ？」

「それは明言だね。病気に気をつけておけば、賢い生き方だと思うよ」

にっこり笑ってコーヒーを勧められても、飲む気にもなれない。どこが賢いのよ。「私がいて、女の人と鉢合わせしたら、まずいよね？」

それでなくても出会ったばかりの人の家に入り込んでしまつてそわそわしているのに、修羅場にまで巻き込まれたらシャレにならない。

「自宅の住所は教えてないから、その心配はないよ。それより、改めて自己紹介しておこうか。名前はエルヴィン・ファーレンブルク。ルヴィと呼び捨ててくれてかまわない、皆そう呼んでるから。年は二十七。父が日本人で母はドイツ人。一人暮らしの独身」

お母さんがドイツ人。西洋寄りの容姿だけど、お父さんが日本人だから日本語も堪能なわけね。年も二十七よりもっと若く見える。

「舞崎想です。大学二年、年は十九歳」

「よろしく。想ちゃん」

気さくな口ぶりでちゃん付けで呼びながら、箱から取り出しかけた煙草たばこを戻している。

部屋に残る煙草の匂いで、私がいなければ気兼ねなく吸っていただろうなと思い、「吸っていいよ」と伝えておく。煙草は好きじゃないし、カフェでも煙が目に入つて痛かつたけれど、人の気晴らしにとやかく言うほうが嫌だった。ましてや彼は、成り行きで私に付き合ってくれているのだから。

「ありがとう」と微笑んで、彼が煙草に火をつける。長くて綺麗な指に似合うそれは、父が縁側で吸うのを楽しみにしている愛用の煙草よりも大きく見えた。テーブルに置かれた箱も大きめで、ラベルの横文字も見慣れないものだ。

「外国の？」

しばらくの間、私も彼も何も話さずにいたけれど、なんとなく気まずくなつて問いかけてみる。

「そう。ドイツ製のダビドフ・マグナム。人前で吸うとよく訊かれる」

「ドイツの血が流れてると、やっぱりそっちの煙草がおいしい？」

「これはたまたまだよ。向こうの大学にいたときに吸い始めたから」

笑つて言うので、もつといろいろ訊いてみたくなって質問した。

「日本語も完璧だけど、ドイツにも長く住んだの？」

「幼稚園と大学と大学院がドイツで、日本は六歳のときから九年いた。インターナショナルスクールを途中で辞めて、アメリカの高校に二年。それから二十五までドイツ。ま

た日本に戻って二年」

慣れたように説明すると、それまでの微笑をかき消して、煙を長く吐き出しながら吸いかけの煙草を灰皿に置いて立ち上がる。それとなく拒まれたように感じ、個人的なことを詮索するのはやめておこうと口を噤んだ。

普通に——経歴も女性関係も、私の日常の中では異質なもののだけど、普通に生活をしている人なんだ。ここが私の暮らしていた世界と同じ場所なのか、それとも違うのかは、私にはまだ判断ができない。言葉も何の障害もなく通じているし。けれど、万が一彼の言うように違う世界だとしても、そこで普通に暮らしている人がいる——私の馴染んできた一般常識と同じフィールドで生きている人がいる。……そう考えるだけでも、あまりに類似した世界が奇妙すぎて、恐ろしくなってくる。

「これ、見てくれる？」

戻ってきた彼が差し出した二冊の雑誌の表紙を眺める。『クーリアー・ジャボン』なんて、あるのは知っていても手に取ったことはない。そう思ってから、雑誌も同じ物があるし、自分はやはりフツーにいつもの世界にいるのではないかと彼に対して疑心暗鬼になる。ところが、十三ページを見てと言われ捲った私は、思わず「あっ」と叫び顎がハズレそうになった。

「舞崎、玲……お母さんが載ってる!!」

「やっぱり。車の中から見たとき、見覚えがあると思ったんだ。有名な宝飾デザイナーだよ」

「誰が!？」

「だから、君の……お母さん? レイ・マイザキといえば、世界中に名を知られている宝飾デザイナーで、メディアでもしょっちゅう見かける。この世界ではね」

この世界、ではねって。

「私の母は、専業主婦のはずなんだけど?」

いつの間にかこんな有名人名人になってたの!? しかもお洒落で、カメラにも慣れた表情で、風格さえ漂わせている。確かに母は、昔の女優の「原節子ばりの美人」だと町内ではもてはやされていたけど、この写真の人は「本物の女優さん?」と思うほど綺麗で、洗練されていた。

娘の知らないところで、何をやってるのよ? と写真に向かって詰問しかけるのを堪えて、食い入らなばかりに雑誌に見入る私。……パニック。まさに本日の大トリ。

「多世界や並行世界の話をする前に、簡単に素粒子の仕組みを伝えたいんだけど」

一から説明すると言っていたルヴィが、紙とペンと取り出して図を描きながら話を始めた。

「人間の体は細胞からできていようね。細胞を分解すると原子になり、この原子を構成しているのが素粒子。物質を構成する最小単位だ。原子は電子、陽子、中性子の三つから成り立つ。これは高校で習った？」

素粒子。授業では教わっても、日常では耳慣れない単語だ。

「……なんとなく」

「原子の中心には原子核があつて、その中に陽子と中性子が入っている。原子核に入っている陽子の数で原子の種類は決まるんだ。電子は原子核の周りを回る。中性子が原子核の中で増えると、原子が崩壊して、別の原子になる。壊れるときに陽子や中性子が放出される現象、これがよく知られている放射能、放射性崩壊と呼ばれるものなんだ。規模が異なるだけで、人間の体でも常に行われている。ここまではイメージできる？」

「……大体は……」

OKと呟いたルヴィが、新たな図形や数字を記して話を続けていく。自分の両手のひらを眺めつつ聞いているけれど、本音を言うと、理系が苦手な私にとっては、今説明されていることはすでにファンタジーにしか聞こえず、実感が乏しい。この肉体で起こっている話だと聞かされても、「そうなんだ？」としか言いようがない。

「原子は一定の確率で壊れる可能性がある。またすべての原子が一気に壊れるわけではなく、徐々に壊れていくんだ。物質を構成する原子の数が半分になるときを、半減期と

いうのはわかるかな。この半減期は、考古学などで年代推定をする技術にも用いられているから、放射性炭素年代測定って言葉とか馴染みがあると思うけど」

「……言葉は知ってる。ねえ、説明がシンプルで手慣れているけど、あなたって何のお仕事をしているの？」

「量子コンピュータの研究開発。大学では物理を専攻していたから、専門なんだよ」

苦笑して、紙に今度は猫の落書きをしたと思つたら、それを大きな箱の図で囲み、「この箱は宇宙のイメージね」と指し示す。

「ここからが本題。今説明した事柄から、過去にシュレーディンガーという有名な物理学者が、思考実験を行った。これは後に数式でも表わされている。自身の見えない箱の中に中性子の多い原子を入れ、原子が壊れると毒が発生する装置を作る。そしてその中に猫を入れるんだ。原子が壊れる可能性は五十パーセントと仮定する。もし原子が壊れれば毒ガスが発生して、箱の中の猫は死ぬ。この時、外からは箱の中が見えないので、猫の生死はわからない。死んでるかもしれないし、生きてるかもしれない。量子論の立場では、この状態を「生と死の両方を兼ね備えた状態」、つまり二つの世界が存在すると考えるんだ」

「ここまでくるとさっぱりお手上げ状態。「シュレーディンガー方程式を使って計算するとこの場合は」と、数式を紙に書いてくれているもちゃんぶんかんぶん、ますます理解不

能になつてくる。真剣に耳を傾けてはいたけれど、難解すぎてあくびまで出そうになつてしまい、必死でバレないように嘔み殺して口元を引き締めた。

「人間を形成する素粒子についても、同じことが起きていると仮定できる。あくまでも仮説だし、猫の思考実験はわかりやすい例えとして生死を使っているだけで、常に生死に関わるわけではないけどね」

そこで説明を止めると、ルヴィイはコーヒーを一口飲み、声に出さずに唸っている私を案じるように見やつてきた。

「シユレーディンガーの思考実験の後に行われた、電子一個による干渉実験を見ると、二つの世界が同時に存在するということが、逆に言えば、世界が二つに分かれるというこの分岐理論が決しておとぎ話ではない可能性を見出せる。まだ素粒子の段階でのみ観察できる現象だけだ。でも、そういう理論は一般にあまり流布しないし、説明できる人間も少ない。だからどうしても、胡散臭いだけの話に思えるかもしれない。またこれらについては、そうではないかと唱える学者もいれば、慎重に考え公言しない学者もいるし、もちろん懐疑的に見る学説もある。僕個人は、公言はしていないけれど、どちらかといえば肯定的に考えてきた」

「つまり……素粒子というものは、常に枝分かれしながら存在している……と言いたいの？」
難しいことはさっぱりだけど、結論はそういうことなのかと問うと、ルヴィイが頷き、

肯定する。

「早い話がそうかもしれないということ」

「枝分かれした場合、その一方はどこにあるの？ 同じ地球上に存在するの？」

「分岐するのは素粒子だけではない。宇宙ごと分岐しているんだ」

「宇宙ごと？ それって、めちゃくちゃたくさん宇宙が存在するってことにならない？」

「そうなるね。人間の感覚で捉えることは無理だろうけど。それに、その宇宙同士、つまり並行して生まれた世界同士が干渉し合うことはできないといわれている」

そこで言葉を止めて、正面のソファに座っているルヴィイが私を注視した。

「ただし干渉できないと確認した者はいないし、確認する術はない。そして——君は、ここにいる」

「私が別の世界に紛れ込んだってこと？ ……その話を、私に信じろって？」

「説明している僕も信じ難いけれど、状況や君の話を鑑みると、こう結論づけるのが妥当だよ」

ソファの背もたれに体を預けて、聞いたことを反芻してみたところでやっぱり理解はできないし、納得もし難い。こうしておかしな状態を体験していても、受け入れきれない。「起きないだろうことが、私に起こったのだとすれば……私、どうすればいいの。私のいた場所に、どうしたら戻れるの？」

「……どうしたら戻れるのかは、僕もわからない。理論的にわかる人間はどこにもいないと思う」

潜めた声の返答を受けて、私はもつと深刻な問題に気づいてしまった。素粒子だの中性子だのという難解な理屈よりも、ずっと由々しき問題に。

「……今日の晩ごはん、どうしよう……」

「え？」

「並行世界とやらに飛んできたとしてね。コーヒーは飲めたし、今のところそれでおなか痛いかはわからないから、食べ物はず平気だと思うんだけど。ただ、食事代も限られてるし、寝るところもないし。とりあえず、それをどうしようかと」

頭に入れてもわからない話は、正直どうでもいい。けれど、三十分の間に建て替えられた家と、なぜか超有名人になっている親のところに、このこ行つてはならないことくらいはうつすらと理解できた。となると、食事と寝床の確保が切実な問題になってくる。バッグの中のお財布の中身は五千円ぽっきり。これでどう過ごしていけばいいのやら。

困り切つて腕を組み、口を噤んだ私を、彼が無言で見つめてくる。ペンを持つ手を宙で止めたまま、瞬きもしていないのがちよつと怖い。誰かにそこまで見つめられたことがない私は、身の置き場がなく困ってしまった。そこで気がついた驚愕の事実。

ハンサムで、女性関係が派手らしい異性と、二人きりの部屋。

「私………じゃ、そろそろ。お邪魔しました」

引き攣り笑いを浮かべてソファを立とうとしたら、

「どこに行くの？」

と、冷静に訊かれてしまった。どこにと言われても答えられないけれど、この部屋にいるよりは野宿をするほうが安全に思えてくる。

「一度関わった以上、放り出せないよ。うちなら、好きだけいてくれてかまわない。

冷蔵庫に食糧もあるし、足りなければ買い足しておくから、好きだけ食べてくれていい」

好きなだけ食えと真顔で言ってくれても、全然ありがたいと思えないのは、なぜだろう？ 寝床と食糧を提供してもらえないかわりに、要求される何かを感じているからだわ。

世の中、タダほど高いものはないと、大学生にもなれば学んできているわけで。

不安と動揺で涙が出そうになり、ぎゅっと目を閉じる。これも生きる手段、と覚悟を決めるしかない。どうにか食いつないで、元の生活に戻るためにも。相手が真正正銘、

自分と同じ人間なのか？ って追及したくないわけじゃないけど、精神の安定を保つためにそこは考えないほうがいい。

「初めてなので……優しくしてください」

「……何の話？」

両目を開いた先にある怪訝な顔。初めてかどうかはこの人にとっては重要じゃないの

ね、と哀しい気持ちで鼻を吸る。生きていくためとはいえ、大事にしてきたものを、その価値のわからない人にあげるなんて。悔しいけれど、わんわん泣きたいけれど、仕方がない。

「もてなかつたんだろ、つて言われればそれまでですけど。合コンでお持ち帰りのモーシヨンをかけられたこともなかったし。一回ヤツたら責任取らなきゃいけない御令嬢に見えるんだよ、なんて、友達にも笑われて。つまりは重そうって意味なんだと思うけど。でも、私なりに大事にしてきたんで、こんなふうな体で支払うのは辛いんですけど。だけど」
 言っているうちに、だんだん鼻水が垂れそうになる。必死で吸っても、泣くのを堪えれば堪えるほど顔がぐしゃぐしゃになってきているのが自分でもわかる。彼が啞然としているのは、あまりに醜い顔を見せられて、驚いて言葉も出ないからなのだろう。

「満足していただけるかはわかりませんが、一生懸命」

決意表明をしていたとき、「ブッ！」と派手な音がした。緊張のあまりオナラまでかましてしまったかとギョツとする私の前で、彼がソファに転がり、おなかを抱えてげらげら笑っている。整った顔をくしゃくしゃにして笑うのが超可愛いなんて、こんな状況なのにときめいてしまう心臓をどつきたくなくなっていた私へ、息をするのも苦しそうに彼が言った。

「あのね……。君、ヘンだつて言われたことない？」

「いいえ？」

「お嬢さん育ちだつて言われたことは？」

「それはたまに」

「だろうね。心配しなくていいよ。僕も君に、責任の取れないことをするつもりはない。体で支払ってもらわなくても、無償で部屋も食べ物も提供するよ」

「でも、タダほど高いものはないですから」

「僕から君に見返りを要求することはない。約束するから安心して。それに、僕もバージンは趣味じゃないから」

見返りを要求しない、安心して、と聞かされて、助かった！と思っただけなのに。最後の言葉がスコーンツと直撃して、穏やかな顔に戻れない私があった。

バージンは趣味じゃない。それは、私が好みじゃないと、宣言されたようなもので。いい男から言われると、なにげに……シヨックなんですけど。カラダしか提供できるものがなく、彼も男としてそれを望んでいるはずだと悲壮な決意を固めたときよりも、ずっと強烈なエルボーをかまされた感じ。

大笑いしている彼と、ピクリと口元すら動かせない置物と化した私の間に、珍妙な時間が流れた後で、ようやく笑いを収めた彼が口を開いた。

「どう受け止めていいのか、混乱してはいるんだ。けど、大変なのは君のほうだから、